4つの視点から考える

幸せのためのヒント

File 61

〈福祉〉とは、幸せ、豊かさ。それを実現するヒントを教えてくれる人・物・事を、次の4つのキーワードに沿って紹介します。

コミュニケーション ▶▶▶ 心理的な壁をなくす、やさしさを育む
暮らす ▶▶▶ 安心できる居場所や暮らしをつくる
はたらく ▶▶▶ 自分らしく活動する、成長する
食と健康 ▶▶▶ 食を大切にして健やかに生きる

#はたらく
#コミュニケーション

常に“新参者”でいるということ

～“治さない医者”の三宅琢さんが考える自分の社会的役割～

取材・文 小笠原 綾子（おがさわら りょうこ）
ライター・編集者としてインタビュー記事作成や印刷物の制作に携わる。表立って語られることのない個々のこだわりや小さな営みに関心がある。散歩や旅行が好きで、旅先での人やモノとの一期一会を大切にしている。

着なくなった白衣と遊び心のあるオフィス

医療とは何か？ 医者の役割とは？

三宅琢（みやけたく）さんと話していると、そんな疑問が頭のなかをめぐる。

眼科医として視覚障害者や高齢者にICT機器やアプリを処方したり、産業医として企業で働く人のヘルスケアや法務にかかわったり。活動のフィールドは医療や福祉、介護にとどまらず、教育の現場にも広がっている。発達障害のある子どもたちの学びを支援したり、学生対象のワークショップでファシリテーターを務めて若者のアイデアを引き出したり。各分野を泳ぐように行き来し、それぞれの現場に新たな風を吹き込みながら、課題の解決を図ってきた。

そうした過程で得た知見を投入したのが、神戸市立神戸アイセンター病院のエントランスの一角にある「ビジョンパーク」（2017年に誕生）。「もし患者さんが失明宣告を受けたとしても、希望を見つけて元気になれる空間をつくってほしい」という依頼を受け、コンセプト設計を担当することになった三宅さんは、眼に障害のある人たちが独りではないと実感でき、生きることに希望を持ってもらえるような空間づくりを目指した。

患者や医者、建築家、音響デザイナー、ブックディレクター、全盲のクライミングウォールの選手といった仲間たちと対話を重ねたことで生まれたのは、障害がある人もそうでない人も、子どもも大人も遊びに行きたくなるようなスペース。公園のように様々な人たちが行き交う場に、コミュニケーションや気づきの機会が自然に生まれる仕掛けが施されている。

そんな三宅さんのオフィスは、品川駅に直結するビルの28階にある。

「そういえばこれ、しばらく着てないですね」

入り口に掛けてある白衣を見て、そう教えてくれた。

三宅琢さんは、東京大学先端科学技術研究センターのプロジェクトでの子どもたちとのかかわりを通して、「体裁を気にした大人ぶった生き方をやめる勇気をもらった」と教えてくれた。

大きな窓から高層ビルが見渡せる縦長の部屋には、インテリアショップのように、ところどころにオブジェがディスプレイ。昇降式デスクの隣には、名作家具として知られるイームズラウンジチェアが置かれている。「学生時代から家具屋めぐりが好きで、『将来、これを買おう』と決めていた家具を、仕事をするようになってからちょっとずつ買い集めてきました」とのこと。

奥のスペースは、茶室をイメージした空間になっている。「千利休がつくったといわれる茶室に行ったら、3畳でめちゃくちゃ暗かったんです。そのとき、本当に大事な対話って、そのくらいの距離感でなされていたんだろうなと思いました」というのが、このスペースをつくった理由。

仕事仲間や友人を呼んで、白い壁にプロジェクターで映像を投影しながら各自の夢をプレゼンテーションし合ったり、映画の鑑賞会をしたり。時にはゲームの試遊をすることもあるという。

緊張と弛緩が同居するその部屋に、三宅さんらしさが詰まっていた。

同じ価値観のなかでは個性は見つけられない

「知らないフィールドに行くと、“新参者”になれますよね。たとえば教育の分野の専門家だったら、『それは歴史上、こういう理由があるから無理なんです』と、できない理由の説明が先に出てきた